

パステルナークとロシア未来主義

大 西 祥 子

1914年から17年まで、パステルナークは未来主義のグループ〈遠心分離機〉に参加していた。しかし、この時期のパステルナークについては、長いこと、詩的世界の解明はもとより、伝記的考察もほとんどなされなかった。29年にこの時期の詩の多くが改作されたこと、および56年の『自伝的エッセイ』におけるマヤコフスキーと未来主義に関する否定的な叙述がそのおもな原因である。

このような状況に変化をもたらしたのは、マルコフ編『ロシア未来派の宣言と綱領^[1]』（1967年）とマルコフ『ロシア未来主義^[2]』（1968年）の刊行であり、これによってロシア未来主義と〈遠心分離機〉の輪郭が明らかになった。1972年には『文学の諸問題』誌に10年代のパステルナークの手紙が九通発表された^[3]が、〈遠心分離機〉とパステルナークの問題を本格的に扱った論文が現れたのは79年になってである。フレイシュマンの『“未来派”パステルナーク断章^[4]』、『〈遠心分離機〉の歴史^[5]』とバーンズの『ボブロフへの手紙^[6]』がそれである。フレイシュマンは、マルコフの『ロシア未来主義』を踏まえ、72年に発表された詩人の手紙とソ連中央国立文献保管所のアルヒーフを資料に加えて、〈遠心分離機〉の歴史を克明に描きながら、〈詩の中二階〉グループに属した未来派詩人ポリシャコフとパステルナークの共通点を示した。バーンズのほうは、詩人の未発表の手紙を中心に、〈遠心分離機〉の指導者セルゲイ・ボブロフとパステルナークの関係、および、未来派全体のなかでの〈遠心分離機〉の活動を明らかにしている。

フレイシュマンとバーンズの論文をもって、〈遠心分離機〉時代のパステルナーク研究は新しい局面を迎えたといえるが、まだ多くの問題が残されている。本論文では、〈遠心分離機〉の二つの文集に掲載されたパステルナークの論文『ワッセルマン反応』（1914年）と『黒い杯』（1916年）を取り上げ、この時期のパステルナークの詩法と芸術観を考察し、それがのちの詩人の詩的世界にどのような影響をもたらしたのかを明らかにしてゆく。

1

1913年、モスクワ大学哲学科を卒業したパステルナークは、ボブロフ、ロクス、アセーエフらとともに〈リリカ〉に参加する。〈リリカ〉は印象主義の画家アニーシモフの主宰するグループで、13年夏から活動を開始し、ボブロフ『葡萄蔓の園丁』、アセーエフ『夜のフルート』、パステルナーク『雲の中の双生児』などの詩集、リルケとゲーテの翻訳詩集を刊行した。グループとしての理念は不明瞭で、「象徴派のエピゴーネン・グループ^[7]」とパステルナークは書いている。主宰者アニーシモフと〈リリカ〉の傾向に不満を持ったボブロフとの対立は13年の秋から冬にかけて激化し、14年1月、ボブロフ、パステルナーク、アセーエフは〈リリカ〉から離れ、未来派グループ〈遠心分離機〉の結成を宣言した^[8]。このあと、パステルナークがアニーシモフに決闘を申し込むなど、「〈遠心分離機〉の誕生には（13年から14年の）冬中、たえまなく騒動がつきまとった^[9]」。

〈遠心分離機〉は革命前に生まれた最後の未来派グループである。ロシア未来主義の始まりについては諸説あるが、チュコフスキーは、1910年2月にペテルブルグで発行された文集『印象主義者のスタジオ』に載ったフレーブニコフの“cmex”の派生語から構成された『笑いの呪文』を未来主義の最初の詩と見なした^[10]。同年5月のフレーブニコフ、カメンスキー、ブルリューク三兄弟が参加した文集『裁判官の飼育場』1号をマルコフは未来主義グループの登場と見ている^[11]。カメンスキーを除いた前述の四人は、11年、クルチョーヌイフ、マヤコフスキー、リフシツを加えて「動物的な力にみたされた新しい世界の見方^[12]」を目指して〈ギレア〉グループを結成し、ラリオノフ、タトリン、ゴンチャローフ、マレーヴィチなどの前衛画家たちとともに芸術運動を展開した。この時期の〈ギレア〉の詩の源となった領域を、マルコフは「幼年時代、先史時代、フォークロア」とし、特徴としてプリミティヴィズムを挙げている^[13]。12年の末^[14]、〈ギレア〉がモスクワで出版した文集『社会の趣味への平手打ち』に発表した宣言は、過去の文学的伝統との訣別、「自由に派生した言葉で辞書の語彙をふやし」、「既成の言語を徹底的に憎む」詩人の権利を主張している^[15]。翌13年2月の『裁判官の飼育場』2号の序文のなかでは、シンタクスの攪乱、リズムの破壊、新しい韻の創造といった具体的な詩作方法が示された^[16]。また、文集『三人』に掲載された論文『言葉の新しい道』で、クルチョーヌイフは「言葉は意味よりも広い」と明言し^[17]、新造語や超意味言語を用いて大胆な詩的実験を行なった。〈ギレア〉の詩人たちが求めたものは、新しい日常、新しい現

実を表現するための新しい詩の言語の創造であり、使い古され、表現の手段にすぎなくなった言葉に言葉が本来持つ「自治権」¹⁹⁹を与えることであった。

一方、ペテルブルグでは、1911年10月、セヴェリャーニンがフォーファノフらと〈自我未来派〉を結成し、宣言『自我未来派のプロローグ』において「理由に基かない詩作」を提唱した²⁰⁰。12年11月のセヴェリャーニンの脱退後はイグナチエフを中心に活動が続け、シェルシェネーヴィチ、ポリシャコフらが13年夏に結成したモスクワの自我未来派〈詩の中二階〉と交流しながら、13年末までに『アドニスの賜物』など九冊の文集を出した。〈自我未来派〉は「未来における自己肯定」を目指し²⁰¹、科学用語やフランス語を語源とした新造語を用い、都市を題材にした詩を書いた。しかし、ブリューソフはこのグループが同時代性に貫かれているとしながらも、「新しい言葉はほとんどない」と評している²⁰²。

互いに攻撃し合い、聴衆を挑発し、騒ぎを起こしながらも、未来派のさまざまなグループは新しい詩を提供して、13年から14年にかけてロシア文壇の中心的存在となっていった。「誰もが未来派について語りはじめた²⁰³」のである。この頃の未来派について、「われわれの『今日』の真の反映である²⁰⁴」とブリューソフは書いている。

イグナチエフの死によって〈自我未来主義〉が消滅し、〈詩の中二階〉も活動を停止した1914年をマルコフはロシア未来主義の一つの分岐点であると見ている²⁰⁵。13年末から未来派が一つにまとまろうとする気運が高まり、14年3月に文集『未来主義者：ロシア未来派最初の雑誌』（以下『フトリストゥイ』と略す）がモスクワで出版された。『フトリストゥイ』に参加したのは、〈ギレア〉と〈詩の中二階〉の詩人たちであり、〈遠心分離機〉がまだ実際の活動を開始していなかったこの時期の未来派詩人全員といえる。文集は大型で全157頁にわたるものである。

『フトリストゥイ』は統一の宣言を出すことができなかった。文集は詩、散文、論文、書評の四つの部門に分かれ、前述した〈リリカ〉出版のパステルナーク、ボブロフ、アセーエフの詩集が書評に取り上げられた。それによると、〈リリカ〉の三人は「古びたロシア象徴主義の大編成部隊が捨てたロシア文学というホテルの部屋」で、「先達が捨てていったタバコの吸い差しを集め、搾りかすのレモンを吸い、砂糖の小片を噛んで」、「誰にも必要とされない本を出版している²⁰⁶」。また、パステルナークの詩は「シェルシェネーヴィチ、セヴェリャーニンの詩行を利用して」おり、「ベールイ、ブローク、イワーノフ、ブ

リュースフ、コズロフ、オドエフスキーと署名したほうがましである」と述べられ、ボブロフは「ブリュースフと共謀している」と断じられている⁸⁰。

たしかに、パステルナークは第一詩集『雲の中の双生児』で、象徴主義詩人をはじめとするさまざまな詩人の文体の模倣を試みており、詩集の題名も「象徴派の本の題名や出版所の名称によくある難解さを真似た、ばかげた⁸¹」ものであった。しかし、ボブロフはアセーエフの詩集『夜のフルート』の序のなかで象徴主義との訣別をすでに宣言し、こう述べている。「象徴主義は甘味スパイスのききすぎた甘ったるい料理と、無遠慮と温順のスープをロシア文学にあまりに多く食べさせすぎた。(略)象徴派に引き裂かれたチュッチェフの傍を通り過ぎて、プーシキン時代の巨匠たちへ、とりわけ忘れ去られたヤズィコフの豊かな金剛石の鉱層へ後退することだ⁸²」。

1914年4月末に、〈遠心分離機〉は文集『ルコノグ』を発行し、宣言『証書』のなかで『フトリストゥイ』の書評に激しく応酬した。『フトリストゥイ』の詩人たちを「変節者」、「裏切者」、「僭称者」、「腰抜け」と断じ、書評における叙述を訂正しないならば、「きみたちは偽りのロシア未来主義者」であり、「過去主義者」(原文は大文字)の実体が露呈されるであろうと結んでいる⁸³。これは象徴派の亜流と非難された〈遠心分離機〉の未来派宣言である。遅れて登場した〈遠心分離機〉こそ、新しい、真の未来主義の道を提示するのだという決意をここに見ることができるだろう。

『証書』の最後には〈遠心分離機〉全員の署名があるが、それには『フトリストゥイ』の書評がエギフというペンネームで書かれたことへの批判も含まれていた。〈遠心分離機〉は書評部門の責任者シェルシェネーヴィチをペンネームの主であると考えた。シェルシェネーヴィチはエッセイ『緑の街』(1917年)の「パステルナークへ」の章でこれを否定しており⁸⁴、真偽は明らかではないが、『ルコノグ』に発表された論文『ワッセルマン反応』で、パステルナークがシェルシェネーヴィチを批判する原因ともなっている。

『証書』には新しい詩的理念は提示されなかったが、『ワッセルマン反応』のなかにそれを見ることができる。パステルナークは、まず、当時の社会について次のように述べる。「民主主義と科学技術のわれわれの世紀において、使命と個人の才能の概念は有害な先入観となった⁸⁵」。そして、文学は産業に組み込まれ、読者が「詩の産業」を支配するようになったが、「詩人と僭称詩人の区別がつく読者、詩人を待ち望み、必要としている読者はいない」と結論する⁸⁶。これは前述した「誰にも必要とされていない本を出版している」という『フト

リストウイ』の書評に対する回答でもある。さらに、このような読者のために「法学的⁹³なわかりやすさの犠牲となった」シェルシェネーヴィチの詩には「イメージの量⁹⁴」が欠けているとして、こう述べている。「類似しているという事実、あるいは、より稀であるが、（決して隣接によるのではなく）類似による連想的な繋がり、これがシェルシェネーヴィチのメタファの源である⁹⁵」。

類似によるメタファがイメージの量の欠乏の原因であるとはどういうことだろうか。14年1月、シュティフに宛てた詩人の手紙には次のように書かれている。「ヴァチェスラフ・イワーノフは詩の根源のもっとも鋭いメタファを感知していません。メタファからなんと同一性を求めているのです。メタファは、一度ならず言われている彼の言葉によれば、『シンボル』でなくてはならないというわけです⁹⁶」。ここでパステルナークが批判しているのは、メタファから同一性を求めること、つまり、いくつかの言葉を決まった方向にむけさせて、一つのイメージ、一つの「シンボル」を表わすようにすることである。言葉はそれぞれのイメージを持っているが、「類似」あるいは「類似による連想的な繋り」から選ばれた言葉で作られたメタファの世界の呼び起こすイメージは一定の特徴しか帯びることができない。これがパステルナークのいう「イメージの量」の欠乏である。類似によるメタファと対置するものとして、詩人は隣接の概念を提示する。

…、メタファを可能にしうる衝迫と内的なドラマチズムという特質は、隣接する諸現象にだけ固有になるのである。言葉は色を塗られて浸透不可能なのだから、比喩される言葉から色彩を借用することはできないことを、シェルシェネーヴィチは知らないのだろうか⁹⁷。

ここにはパステルナークの言葉にたいする考え方が明確に示されている。それは、同時に、新しい詩の理念でもある。言葉はそれ自体独立して固有の色彩を持っており、それを類似の特徴のもとにまとめ、比喩という従属関係にあてはめることは不可能だとする見方は、言葉は単なる意味の伝達手段ではなく、言葉そのものが重要なのだとする〈ギレア〉の言語感覚に共通のものである。破壊、あるいは作り変えることでなく、隣接させることで、パステルナークは言葉が本来持っている自由な特質を明らかにしようとしたのである。パステルナークにとって、メタファを可能にするのは「隣接する諸現象」であり、恣意的に取り出されたのではなく、日常生活や言葉の音の世界で偶然隣り合う言葉

をそのまま詩に持ち込むことである。それによって、言葉は語彙論的意味の呪縛から解き放たれる。自由に結びついたさまざまなレベルの言葉は意表をつく詩句を作り、詩に複雑で豊かな起伏を生み出し、詩的水準を高める。このような方法でパステルナークは「イメージの量」を増加させ、買い手と化した読者の「規定を受けず、それゆえ需要と供給の条件になり得ない³⁹⁾」詩を目指したのである。

パステルナークの詩および散文に「月並でない表現をもたらしているもの」は「隣接連合」であるとヤコブソンは指摘している⁴⁰⁾。また、トゥイニャーノフも、第三詩集『わが妹人生』の詩的世界の形象は、偶然的な特徴によって集められて、「ただ隣り合わせに置かれているにすぎない」と述べている⁴¹⁾。

『ワッセルマン反応』の書かれた時期の詩を見ると、イメージをまとめる傾向の詩が多く、理論と実践との間には隔りがある。しかし、「隣接によるメタファ」は、それまでの未来主義の言語感覚を踏まえた新しい理念である。それはまた、のちのパステルナークの詩のなかで独自の手法として現れ、詩人の詩的世界を特徴づける大きな要素となってゆくのである。

2

『ルコノグ』の出版後、モスクワのアルバート街のカフェで〈遠心分離機〉と『フトリストゥイ』の詩人たちは会見した。1914年5月のことである。〈遠心分離機〉からはボブロフとパステルナークが、『フトリストゥイ』からはシェルシェネーヴィチ、マヤコフスキー、ポリシャコフが出席し、「つかみ合いくらいは起こると予想されていた」この会合は、やがて「意気投合」に変わった⁴²⁾。

この時、パステルナークはマヤコフスキーとはじめて言葉をかわし、「圧倒的な印象」を受ける。また、マヤコフスキーとの間に「共通のものがある」のを発見して、月並や模倣を避けるために、「ロマンチックな形式」や「効果をねらうヒロイックな調子」を放棄した⁴³⁾。〈遠心分離機〉と『フトリストゥイ』の会合の翌日、パステルナークはマヤコフスキーと偶然出会い、『悲劇ウラジミール・マヤコフスキー』の作者自身による朗読を聞くことになる⁴⁴⁾。マヤコフスキーの抒情主体「私」はつねに前面に押し出され、誇張され、肥大してゆく。マヤコフスキーの「私」から離れようと決意したのち、パステルナークは抒情主体「私」をどのように表現していったのだろうか。詩『献辞』には次のように書かれている。

人々は、そこで愛し、働いている！

人々よ、そこで狂暴さは私のよりも明らかだ。

人々よ、そこでは私も膝を折る。

人々よ、そこには、あたかも北氷洋から

啓示によって夜どおし、風が吹いているようだ⁴⁴。

ここに描かれているのは、夜どおし、討論し、仕事をする詩人たちのようすである。複数の人々の活動を主題にした詩は、パステルナークの作品のなかでは稀で、この時期の未来派におけるこの詩人の熱狂ぶりを示している。抒情主体「私」の現われかたは独特なものである。この詩のなかの「私」は詩人たちが集まる家の外を吹く風であり、詩人たちの長い夜の狂気は風よりもなお狂暴なのである。風は詩人たちに「ただちに、一言も言わず／書き留め封帯で心から／ワインを、毛皮を／明りと隠れ家を／貧民救済課へ送れ！」と命じるが、ここでも呼びかけるのは「風」であり、抒情主体「私」ではない。マヤコフスキーの抒情主体「私」とは対照的に、事物や現象のなかに紛れこんでしまうパステルナークの抒情主体「私」は、「愛し、働く」「詩人たち」のなかに埋没して、最後まで姿を現わさないのである。

詩は一連四行の強弱弱格で書かれ、大きな文法的逸脱や、新造語、超意味言語は見られない。しかし、すでに13年の後半に、当時用いられていた未来派の詩のフォルム上の工夫を「新しい詩に移行するための手段であり、やがて捨てられるものである⁴⁵」と〈ギレア〉のリフシツが述べていること、また「フレーニコフは韻と掛け詞に集中するために新造語を捨てた⁴⁶」というマルコフの叙述を考慮に入れるならば、新造語と超意味言語が未来主義の詩の唯一不可欠な要素でないことは明らかである。新造語や超意味言語の欠如をただちにパステルナークの未来派詩人としての後進性と考えるのは早計にすぎるだろう。ここでパステルナークの詩に未来主義の詩の特徴を与えているのは、第一に、「書き留め封帯」、「貧民救済課」といった日常語の導入であり、それは語彙の広さにもつながっている。第二は、[нафабрен-фабрик]、[кучер-прикучен]、[поленьев-затменье]などの不完全韻である。不完全韻はこの時期のパステルナークの詩の特徴をなすもので、サモイロフの統計によると、12年から17年の詩の押韻の48%が不完全である⁴⁷。

『フトリストウイ』に参加した詩人たちが新たな統一グループを結成するこ

とは結局なく、文集の次号も出版されなかったが、14年5月の会見を契機に〈遠心分離機〉との交流が始まった。〈ギレア〉=立体未来主義の攻撃的な性格は変化してゆき、14年始めに出版された『吠えるパルナス』について、「立体未来主義最後の戦闘的な文集⁶⁴⁾」であったとマチューシンは述べている。

14年7月、第一次世界大戦が勃発した。ロシアの文学者たちは戦争を賛美する作品を書き始める。マヤコフスキーは戦争を「興奮して受け入れ⁶⁵⁾」、アンドレーエフ、ソログープらは『ジャーナリスト』誌に愛国的な声明を発表した。一方、〈遠心分離機〉の文集第2号の発行は、戦争と財政難のため延期され、パステルナークはウラルの軍事施設で働きながら、〈ギレア〉の文集『タンク』、『未来主義者の太鼓』に参加している。詩人は戦争をどのように受け取り、詩を社会のなかでどう位置づけようとしていたのだろうか。16年4月によりやく発行された『遠心分離機第2号』に発表された論文『黒い杯』を見てみよう。

パステルナークは、まず、「思想の深遠が三次元における実現可能なすべての境界を越えてしまった」と象徴主義を非難し、「一步ごと、毎分、毎時、芸術は世紀から責任ある、光栄ある、非常に重要な任務を受けとっているのである」と述べる⁶⁶⁾。しかし、詩人にとって世紀から受けとる任務は戦争賛美ではなく、急速に愛国主義に傾斜していったシェルシェネーヴィチや一部の象徴派詩人にたいし、こう書いている。「どんな外的勢力も、私たちを、たとえ口先でも、明日という日のために歴史の準備に取りかからせることはできない。ましてや、私たちが自発的にそのようなことをあえて企てようとするものもないのである⁶⁷⁾」。

そして、さらに次のように叙述する。「現実 は 分解し つ つ ある。分解し つ つ、二つの相反する極に集まった。『リリカ』と『歴史』の極に。両方とも、ひとしく絶対的で先験的なものである⁶⁸⁾」。ここにはマヤコフスキーとの立場の相違を明確に打ち出したパステルナークの独自の芸術観がある。マヤコフスキーは開戦当時の愛国的な考えを変え、批判的な目で戦争を見るようになっていた。しかし、積極的に戦争にかかわろうとする態度はいっそう明らかになっていった。『黒い杯』にも書かれているとおり、「目を射る『最新のニュースの束』を扱った⁶⁹⁾」エッセイを『新サチリコン』誌に次々と発表したのである。「破壊という第一過程は終わった⁷⁰⁾」と考えたマヤコフスキーは、未来主義運動の新しい道を求め、「歴史」に参加すること、すなわち、現実のなかに飛びこみ、現実とともに芸術を変化させ、現実の変化を追い越すような芸術を求めた。これは、それまでの未来主義の芸術観に立脚する考えであるが、戦争を契機にマヤコフ

スキーの詩の照準は正確に定まり、ひたすら戦争へ、戦時下の人々の生活へと向けられていったのである。これにたいし、パステルナークは「限られた瞬間の助けを借りて、一時的なものから永遠なものへと改革すること」が「真の未来主義」の芸術だと書いている⁸⁹。つまり、現実にとどまりながら、冷静な目で観察し、現実における一瞬、一瞬の小さな現象を詳細に書きとってゆくことによって、歴史上の大事件、すなわち戦争に左右されることなく、現実のなかに隠された真の意味を表現しようとしたのである。『黒い杯』に書かれた「リリカ」は大文字である。「リリカとは詩を可能にする詩のエLEMENTそのものである⁹⁰」とボブロフは叙述しており、パステルナークの「リリカ」はこのような意味で使われている。『「リリカ」の極に立つ』という叙述には、詩の純粋性を保とうとするパステルナークの決意もこめられている。

この時期のパステルナークとマヤコフスキーの芸術観は、その後の両者の方向を決定した。マヤコフスキーが17年の革命を熱狂的に受け入れたことはよく知られている。一方、17年に書かれたパステルナークの第三詩集『わが妹人生』には、革命前夜の日常生活が偶然に隣接する諸現象によって描かれてはいるが、革命賛美、あるいは批判の詩句は一つとして含まれていない。パステルナークは『「リリカ」の極』に立ち続けたのである。

〈遠心分離機〉時代の詩は第二詩集『障害物を越えて』（1917年）にまとめられた。表題詩『ペテルブルグ』には、^{ヘーデル}障害物を越える人々の姿が描かれている。詩『抒情的空間』においても、地上から離れてゆく熱気球、まさに飛び立とうとする犬鷲が書かれ、詩集全体に跳躍、飛翔への志向が色濃く現われている。この詩集の題名について、「たんなる題名ではなく、一つの時代、手法を表現する名称である⁹¹」とパステルナークは述べている。読者という買手の規定、伝統的な詩の規範、戦時下における方向づけなどのさまざまな障害物を越えうる新しい詩を、詩人は求めていたのである。

* * *

〈遠心分離機〉の文集第3号は十月革命のために出版されずに終わった。フレイシュマンによると、執筆予定者はボブロフ、パステルナーク、アセーエフ、フレーブニコフ、ポリシャコフ、マヤコフスキーである⁹²。〈遠心分離機〉は未来派による既成の言語の破壊という一段階が過ぎたのちに登場した。パステルナークの使命は、トゥイニャーノフも述べているように、フレーブニコフとマ

ヤコフスキーの叛乱によってはるか遠くに移動させられ、自由になりすぎた言語を宙に浮かせないようにすることにあった⁶⁹。語彙論的意味の枷をはずした既成の言語を偶然によって隣接させ、事物に直接向かわせる方法を、パステルナークは『ワッセルマン反応』のなかに示した。〈遠心分離機〉時代に明らかにされたもう一つの重要な事柄は、『黒い杯』に提示された芸術の時代とのかかわり方である。すでに述べたとおり、この二つの理念と、事物のなかに埋没する抒情主体「私」は、第三詩集『わが妹人生』のなかで開花し、この詩集以降のパステルナークの詩の独特のスタイルを築く基となったのである。

詩集『障害物を越えて』のなかで、次のようなメタ詩が見られる。

詩よ、おまえは吸盤を持つ海綿だ。

豪華な襷飾り，華麗な裾飾りを豊かにせよ。

雲を，谷間を吸収せよ。

夜，貪欲な紙のために，

詩よ，わたしはおまえを搾ろう⁶⁹。（『春』）

この詩の五年後に発表された論文『いくつかの命題』には、ちょうど同じような記述がある。

現代の諸潮流は、芸術を泉のようなものだと考えた。ところが、芸術は海綿のようなものなのである。芸術がどうあるべきかが規定されたが、芸術は十分に吸い上げ、吸収しなければならないものなのだ。芸術は創造表現の手段だと考えられたが、実は知覚器官から成っているのである。そして、いつも観察者のなかにあって、誰よりも純粋に、より鋭く、より正しく見ているのである⁶⁹。

ここに芸術にたいするパステルナークの深い洞察力と、大勢を占め、一見きらびやかに見えるものへの本能的ともいえる懐疑がみられる。それは真実よいものを受け入れる態度と共存している。パステルナークは夢中になって受け入れ、惜し気もなく捨て去る。現状における可能性をせばめることで、未来のより豊かなもの、より新しいもの、より真実なものへと詩人は自分をかり立ててゆくのである。このような姿勢を詩人が身につけたのは、過去の否定から出発

し、より新しい、動的な詩を目指した未来主義の運動のなかでであった。それはパステルナーク自身による幾たびもの過去と現在の否定によって断絶し、屈曲しているように見える詩人の四十年以上の創作の行程を変わることなく貫いている姿勢でもある。詩人自身の未来主義否定の発言のために、〈遠心分離機〉時代のパステルナークとそれ以後のパステルナークとの越えがたく見える断絶もまた、つねに新しいものを求めるまさに未来主義に固有な長い否定の連鎖の輪にすぎない。しかし、おそらく起点となった一つの輪であろう。

- 注(1) Манифесты и программы русских футуристов. München, 1967.
 (2) V. Markov. Russian Futurism. Los Angeles, 1968.
 (3) Вопросы литературы. М. 1972, № 9, с. 139-172.
 (4) Л. Флейшман. Фрагменты “футуристической” биографии Пастернака. Slavica hierosolymitana, Jerusalem, No. IV, pp. 79-113.
 (5) Л. Флейшман. История Центрифуги. Boris Pasternak. Paris, 1979. pp. 19-42.
 (6) C. Barnes. A letter from Boris Pasternak to Sergej Bobrov. Slavica hierosolymitana, Jerusalem, No. V-VI, pp. 523-533.
 (7) Б. Пастернак. Сочинения. т. II, Ann Arbor, 1961. с. 269.
 (8) Л. Флейшман. История Центрифуги. с. 21.
 (9) Б. Пастернак. Сочинения. т. II, с. 269.
 (10) К. Чуковский. Лица и маски. С.-Петербург, 1914. с. 127.
 (11) V. Markov. Russian Futurism. p. 8.
 (12) В. Лившиц. Полутоглазый стрелек. Л. 1933. p. 11.
 (13) V. Markov. Russian Futurism. p. 36.
 (14) 異同。13年1月。Русская литература конца XIX-начала XX в. М. 1972. с. 537-8.
 (15) Манифесты и программы русских футуристов. с. 50-51.
 (16) Манифесты и программы русских футуристов. с. 51-52.
 (17) Манифесты и программы русских футуристов. с. 64-73.
 (18) В. Лившиц. Манифесты и программы русских футуристов. с. 77.
 (19) Казанский. Манифесты и программы русских футуристов. с. 25-31.
 (20) V. Markov. Russian Futurism. Los Angeles, 1968. p. 73.
 (21) В. Брюсов. Русская Мысль. М. 1920. с. 20.
 (22) В. Лившиц. Полутоглазый стрелек. Л. 1933. с. 123-124.
 (23) В. Брюсов. Сочинения. т. II, М. 1955. с. 258.
 (24) Манифесты и программы русских футуристов. с. 11.
 (25)(26) Футуристы: Первый журнал русских футуристов. М. 1914. с. 140-142.
 (27) Б. Пастернак. Охранная грамота. Сочинения. т. II, с. 269.

- (28) Манифесты и программы русских футуристов. с. 107-108.
- (29) Манифесты и программы русских футуристов. с. 110-112.
- (30) В. Шершеневич. Зеленая улица. М. 1917. с. 87-90.
- (31)(32) Манифесты и программы русских футуристов. с. 112-113.
- (33) シェルシェネーヴィチはモスクワ大学法学部出身であった。
- (34) quantité imaginaire.
- (35) Манифесты и программы русских футуристов. с. 116.
- (36) C. Barnes. A letter from Boris Pasternak to Sergej Bobrov. p. 528.
- (37) Манифесты и программы русских футуристов. с. 116.
- (38) Манифесты и программы русских футуристов. с. 115.
- (39) R. Jakobson. The prose of the poet Pasternak. Macmillan, pp. 135-151.
- (40) Ю. Тынянов. Промежуток. Архаисты и новаторы. Л. 1929. с. 566.
- (41) Б. Пастернак. Автобиографический очерк. Сочинения. т. II, с. 85.
- (42) Б. Пастернак. Охранная грамота. с. 281.
- (43) Б. Пастернак. Охранная грамота. с. 272.
- (44) Б. Пастернак. Стихотворения и Поэмы. М.-Л. 1965. с. 585.
- (45) Манифесты и программы русских футуристов. с. 77.
- (46) V. Markov. Russian Futurism. p. 300.
- (47) Д. Самойлов. Книга о русской рифме. М. 1982. с. 255.
- (48) Русские кубо-футуристы. Воспоминания М. В. Матюшина. К истории русского авангарда. Stockholm, 1976. с. 154-155.
- (49) В. Маяковский. Я сам. Собрание сочинений. т. 1, М. 1978. с. 55.
- (50)(51) Б. Пастернак. Сочинения. т. III, с. 149.
- (52)(53) Б. Пастернак. Сочинения. т. III, с. 150-151.
- (54) Манифесты и программы русских футуристов. с. 160.
- (55) Б. Пастернак. Сочинения. т. III, с. 149.
- (56) С. Бобров. Труды и дни. М. 1913. с. 118.
- (57) Борис Пастернак. Стихотворения и Поэмы. с. 625.
- (58) Л. Флейшман. История Центрифуги. с. 29.
- (59) Ю. Тынянов. Промежуток. Архаисты и новаторы. с. 562.
- (60) Борис Пастернак. Стихотворения и Поэмы. с. 88.
- (61) Б. Пастернак. Сочинения. т. III, с. 152.

Б. Л. Пастернак и русский футуризм

Сатико ОНИСИ

Борис Пастернак был членом русской футуристической группы “Центрифуги” с 1914 г. по 1917 г., однако его произведения этого времени долго не привлекали к себе внимания исследователей и в СССР и в других странах. Только в 1979 г. были опубликованы три статьи о раннем Пастернаке: “Фрагменты “футуристической” биографии Пастернака”, “История Центрифуги”, написанные Л. Флейшманом, и “Письмо Пастернака Боброву” К. Барнса. Однако, какие у Пастернака были взгляды на поэзию, какое влияние они оказали на Пастернака после Центрифуги, эти главные вопросы пока ещё остаются невыясненными.

Центрифуга, последняя футуристическая группа перед революцией, была создана С. Бобровым, Пастернаком и Н. Асеевым в январе 1914 г. Это было время, когда русские футуристы, появившиеся в 1912 г. и писавшие новые стихи заумным языком и неологизмами, заканчивали первый этап разрушения традиции поэзии и искали новый путь. В апреле 1914 г. был издан первый сборник Центрифуги, “Руконог”, в котором была напечатана статья Пастернака “Вассерманова реакция”. Там Пастернак представил новый метод стихосложения. Подвергая критике “метафору по сходству” Шершеневича, он утверждал, что “только явлениям смежности и присуща та черта принудительности и душевного драматизма, которая может быть оправдана метафорически”. Пастернак поставил себе целью освобождение слов от нормального семантического словоупотребления и приумножить поэтические слова, причем, не разрушая слова, как предшественники поэты-футуристы, а располагая слова по случайности.

В мае 1914 г. Пастернак познакомился с Маяковским. В его стихах Пастернак нашел с собой общие элементы, и стал искать иной путь. В результате возникло свойственное Пастернаку лирическое “Я”. Так, в стихотворении “Посвящение”, в котором описана жизнь поэтов-футуристов, мы видим это лирическое “Я”, которое отличается от лирического “Я” Маяковского. У Пастернака лирическое “Я” не выражается прямо, а скрывается в образах—“поэтах”, “дворе” и т. п.

После возникновения первой мировой войны разница между Пастернаком и Маяковским стала ещё более заметной не только относительно лирического “Я”, но и относительно идей поэзии. Маяковский писал стихо-

творения и очерки, используя новейшие события, активно участвовал в истории. Пастернак же писал в статье “Черный бокал”, напечатанной во “Втором сборнике Центрифуги”: “действительность разлагается и собирается у двух противоположных полюсов: Лирики и Истории”. Не отрываясь от действительности, он искал в ней истинный смысл, наблюдая её и отражая не большие исторические события, а маленькие бытовые явления. Такое отношение к действительности ясно выразилось в сборнике стихов “Сестра моя жизнь”, где, хотя ежедневная жизнь во время революции выражена посредством “метафоры по смежности”, но о революции ни одного стиха не написано.

Таким образом, во время Центрифуги у Пастернака сформированы свои взгляды на поэзию, которые стали основой его поздних стихов.